

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

東京が桜満開のころ、札幌にて「カルーセル麻紀さん傘寿ハッピーイヤー」の催しが行われた。お祝いにつけつけたミッツ・マングローブさんとの軽妙なやりとりを、壇上の末席で聞いていた筆者。プラチナヘアとオートクチュールドレスのベストマッチ。なんだか夢の中にいるような気分で、御年80歳のマシンガントークを聞いていたのだった。8年前初めての対談の後、①「取材なしで、あなたの少女時代を書かせてください」とお願いした際、彼女は理由も聞かずに「いいわよ、とことん汚く書いてちょうだい」と言った。

好きに書いていいと言われたので、本当に好きに書いた。取材をすればご自身のことを面白おかしく話してくれたと思う。おそらくそれが、カルーセル麻紀流のもてなし方だったろうから。

ただ、小説家は聞いたことをそのまま書くことが出来ない生きものだ。言葉の裏側を探るくらいなら、虚構をまっとうしていつそ聞かずに書くのが、一家を成した人への礼儀だろうとも思った。

いつ殴られてもいいと覚悟して書いた小説は、いまのところマイベスト。

作中、冴えない幼なじみが出てくるのだが、釧路北中学校の23期後輩の私が同級生になれるのも、小説という虚構のおかげだったろう。

書きながら思ったのは、この世には人の運命を変える人間がいるらしいということだった。おそらく本人は自身の繊細さを隠し、生きたいように生きて見せているのだろうけれど。

他人と比較することなく己を全うする生き方は、不思議なほど関わった人の意識を変えてゆく。

言葉を選ばずに言うと、長い芸能生活というのは、人を楽しませるために存在してきた「生きた虚構」の時間だったのではないか。だからひっくり返し、虚構で打ち返すようにして書くしか、人間カルーセル麻紀は見えてこなかった。

②闘ってきた相手が時代でも世間でもなく、自身の内面であったこと、ここ数年で少しは書けたのではないかと自負している。

イベントの終盤、客席からすっと手が上がった。筆者と同年代の女性だった。

娘さんが同性婚をして、精子提供を受けたのち5月に孫が生まれるとのことだった。

知ったときは3日間寝込んだのだが、いまは一緒に赤ちゃんを見守り育てて行こうという気持ちになっているという。文章にすると数行だが、ここには人の世の苦悩が詰まっている。

ミッツさんが「母親って、やっぱり3日寝込むのねえ。ウチもよ」と仰った。そして、静かな客席に向かって静かに説いた。

「非難する人を非難するんじゃないなくて、いろんな人がいることを認めあっていきたいものよねえ」

欲しいのは、理解。

理解には尊敬がある。

理解するためには、考える頭が要る。

その頭にこそ柔らかな感性とフラットな教育を、と思う。

戸籍の性別変更者を公にして、自身と世の中を笑い飛ばしながら80歳までやってきた人がいる。

自身で性別を選べるようになってから、20年近い月日が経とうとしている。

泣かずに生きてきた人から学ぶことは多い。

（桜木紫乃「欲しいのは、理解」日本経済新聞夕刊2022年4月14日より作成）

（注）カルーセル麻紀：1942年北海道釧路市生まれ。出生名平原徹男。15歳で高校を中退し、札幌のゲイバーを皮切りに、全国のバーやクラブで人気を博す。大阪の「カルーゼル」で働いていたときに、市川猿之助の紹介で日劇ミュージックホールに出演。以後、舞台、映画、テレビなどで活躍。1972年、モロッコで性転換手術を受ける。2004年には戸籍上の性別を女性に変更。本名・平原麻紀。（カルーセル麻紀『“自叙伝” 酔いどれ女の流れ旅』財界さっぽろ、2015より作成）

問1 なぜ下線部①のように筆者は言ったのか、80字以上120字以内で述べなさい。

問2 下線部②について、それがどのような闘いなのかを本文以外の事例を挙げ、400字以上600字以内で述べなさい。